主を待ち望む信仰

「**イザヤ書**」**40 章 27～31 節**を朗読。

31 節「**しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない**」。

27 節に、「**ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか**」とあります。ヤコブ、イスラエルと呼ばれる人々、本来ならば、最も神様に近い人々です。彼らは一番よく神様のことを知っているはずですが、彼らは自分たちのおかれている立場、身分、与えられている恵みを忘れてしまうのです。日常生活の様々な事に悩まされ、思い煩いに心が疲れ、弱り果ててしまいます。結局、27 節に言われるように、「**わが道は主に隠れている**」「**わが訴えはわが神に顧みられない**」、言うならば、神様は私のことを忘れてしまった。祈っても答えはないし、求めても何の応答もない。一体何のために、神様を恐れ、敬わなければならないのか。そもそも神様なんていらっしゃるのだろうかと疑問に思う。そうなると、私たちの心に肉の力、己の自我性が働いてきます。自己憐憫に陥ります。自分自身を振り返ってみても、そのとおりだと思います。次々と思いがけない事、嫌な事、辛い事、願わない事が続きますと、自分だけがこんな辛い思いをして、悲しい思いをして苦しんでいる。それに対して、神様は何も答えて下さらない。私の味方となったと言うけれども、言葉ばかり、口ばかり。「**わが道は主に隠れている**」。「**わが訴えはわが神に顧みられない**」と思います。私の神でいらっしゃるのに、何にもしてくださらないではないか。そうつぶやく。これはしばしば経験することであります。ちょっと思いがけない事、しかも、それが自分にとって不利な事、願わない事であると、すぐにしょげ返って、膨れっ面をする。まるで子供のようなものです。そして、神様はちっとも答えて下さらない。そういうふつふつした不満、つぶやきが湧いてくる。

ところが、神様は決してイスラエルやヤコブを忘れたわけではない。また、彼らの祈りを聞かない方ではありません。神様はどんなことでもなし得たもう方です。ですから、28 節に「**あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか**」と問われます。これはあなたが神様のことをどういう方だと見ているのか、問われているのです。「**目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ**」と、同じページの上の段に記されています。神様をどういう方であると私たちが見ているのか。信じているのか。まずはその事が問われます。神様を信頼していると言いながら、これもだめ、あれも難しい、どんなにしてもなりようがない、さまざまな理由をつけて、いろいろな事で神様の力を限る。事柄を限定してしまう。これはあきらめるしかない。これは誰それに頼まなければ、などと、だんだんと肉の思いが強くなっていく。それにつれて、神様のことをいよいよ小さく、こじんまりと、飾り物のようにしてしまう。しか

し、そうではありません。28 節に、「**あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者**」と。神様はとこしえの神。永遠から永遠まで変わることのない方。そしてその方は地の果の創造者。地の果というのは、隅から隅までことごとく、すべてという意味で使われた言葉です。神様によらないものは何ひとつないということです。良いとか悪いとか、人は勝手な事を言いますが、どれ一つとって、神様の造られたものでないものはない。神様はすべてのものの創造者、造り主でいらっしゃる。それは森羅万象、生活している環境を造られたというだけではなく、そこに生きる私たちの人生、日々の歩み、その一つ一つも神様の創造のみわざによるのです。私たちは一日一日を自分の計画で、自分の努力で過ごしていると思いますが、それはとんでもないことです。大間違いです。私たちの背後にいらっしゃる神様がそれを造り出しておられるのです。私たちは神様の道具、手先として使われているにすぎないのです。ですから、「**主はとこしえの神**」、神様は歳をとることがない。人はどんなに壮健な、力に満ちた人であろうと、歳と共にそれは失われていきます。だから、神様も同じようにそろそろ歳ではないだろうか。耳も遠くなったに違いない。足腰も弱くなったに違いない。あまり無理な事は頼めないと思うのなら、とんでもないことです。そんな神様ではありません。とこしえの神、永遠から永遠まで、変わることのない、力ある方です。しかも、地の果の創造者。すべてのものの造り主。さらに、「**弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい**」。神様は弱ること、疲れることはない。私たちはしょっちゅう疲れます。普段しないような事をすると、足腰にすぐきます。つい思いがけない事に心奪われ、早くしておかなければと、普段しないようなことをすると、痛くなかったところが痛くなり、腰が痛い、足が悪いなど、そんな事になります。すると、神様もまるでそうであるかのごとく、神様の力を弱いもの、限られたものにしてしまう。ここは自分がしておかなければ、ここまでは私たちがしなければ、私の領域だから、私の責任だから、と言って、神様をそこに認めようとしない、神様の力を求めることをしない。肉の力というのはそのようなものです。神様をできるだけ押しのけてしまう。肉というのは、サタンの力です。そのサタンは私たちに「あなたが大将」「お前が頑張ればできる。できない事はない」「そうそう、お前の思う通りだ、正しい、お前は間違いがない」「お前は王様だ」と、私たちをほめます。褒め殺しという言葉がありますが、サタンは盛んに私たちの肉の力、肉なるものを押し出してくるのです。そうすると、神様の霊の働き、目に見えない神様の力の働きについて、だんだんと遠くなっていく。それを自覚することが少なくなっていきます。神様に従っているつもりでも、だんだんと逸れていくのです。私たちが何かしている時でも、熱心に神様を求め、神様の前に自分をへりくだった、小さな者として、神様のあわれみにすがっている間は、たいへん心穏やかに安らぐことができるし、また力

に満たされます。その力は肉の力ではなく、霊の力、たましいの力です。神様はそういう力ある方なのです。そうでありながら、私たちの方が神様の力を拒む。求めようとしない。そして神様を小さなもの、力ないもの、役に立たないような存在にしてしまう。これがサタンの私たちに働きかける力です。ですからここで「**主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい**」と。神様が私たちにご計画して下さるすべてのわざをご自身の知恵をもって造られた。私たちの人生自体、神様のみ思いによって、ここにあるのです。今、存在している。でも、人は神様のなさるわざを喜ぶことができない。感謝することができない。そして自分の肉の求めるところ、自我性、わがままな力、これが私たちを支配しようとしてきます。ところが、神様は私たちに「**弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる**」のです。神様はどんなにでも満たすことができる力の源でいらっしゃる方。弱った者には力を与える。だから、私たちが自分の肉の力で頑張ってしようとすると、それは必ず行き詰まります。そこに語られていますように、弱り果て、疲れる。30 節に「**年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる**」。年若い者、壮年の者、これは肉の力が一番充実した時だろうと思います。そういう肉の力で頑張る人、少々徹夜しようと、何をしようと、食事を抜いても、自分は疲れを覚えないと言う若い力のある人であっても、それには限りがあります。必ず弱る。衰えてきます。衰えてくると、不平が出、不満が出、人をのろったり、つぶやいたり、様々な悪しき思いが次々と私たちの心に満ちてくる。私たちの肉の思いがサタンの支配によってますます強くなって、神様に対する思いが萎んでしまう。そして、神様の霊の力を失ってしまいます。だから、年若い者、壮年の者、年が若いから、年齢がまだあの人よりも若いから、私は力がある、元気、少々のことでは私はへこたれないと、自慢しますが、そういう人は何か思いがけない問題に出会うと、ことっと倒れてしまう。心が折れてしまって、力を失い、一気に弱くなる。だから、自分が弱くなる時、それは肉の力が失われていく時です。だから、そこでへりくだって、謙遜になって、主を待ち望む。神様の霊の力を私たちが求めていくことです。

ところが、私たちは疲れたら、なかなか神様に行こうとしない。頑ななのです。私はよく思います。「私は弱くて、私は力がなくて、何もできなくて」と言われる。よほど弱い人かと思ったら、案外と頑固なのです。頑固、頑なというのは、一つの力です。人が何と言おうと、こうでなければ、こうであるべきだと思い込む。そうすると、とんでもない力を発揮します。今まで弱くて、寝ているような人が突然のごとく、「私がやるのだから」と、怒り狂ったようになる。これも一つの力です。しかし、その力は、サタンの力、悪の力ですから、神様の前にへりくだることはできません。「**私**が頑張らなければ」、「**私**がやらなければ誰がやる」。「誰

でも、ほかの人が代われるから」、「いいえ、**私**が」と言う。しかし、よほど喜んでしているかというと、その返す刀で、「あの人は私を理解してくれない」、「私のことを助けてくれない」とつぶやく。恨みつらみがわいてくる。肉の力から出てくるのは、腐敗、悪臭です。つぶやき。周囲の人が「いくらこうなのだから、あなたはこういう事をしておいた方がいいでしょ」と言っても、「いいや、そんな事は関係ない。私は私でやる」と、そういう我の強さは良さそうですが、神様の前には大きな罪です。神様の力に満たされる時、それは確かに強い力ですが、同時に優しさがあり、すべてのものを包み込むおおらかさがあり、そして人に与えるエネルギーを広げていく力があります。ところが、肉の力は、自分のほうにすべてのものを吸い寄せて、集中させていく方向に動きます。30 節に、「**年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる**」とあります。どんなに身体的な条件が整っていて、力があるように思えても、必ず人は疲れ、倒れてしまう。私たちにとって最も大切な力は何か。それは神様からいただく力です。31 節に、「**しかし主を待ち望む者は新たなる力を得**」とありますが、神様に期待する、神様を求めることです。「使徒行伝」を開きたいと思います。

「使徒行伝」1 章 3～5 節を朗読。

イエス様は十字架に命を絶たれた後、墓に葬られ、それで終りではなく、三日目によみがえって下さいました。それから後、「**四十日にわたって**」とありますように、たびたび彼らに現れて多くの人々にご自身を現わして、今もなお生きておられることを証しして下さった。そして「**神の国のことを語られた**」とあります。神様を中心とした神の国、言うならば、神様の力によって支配されている所、またその人たちのことです。私たちは神様が罪をきよめて神の子としたと、私たちのうちに御子の霊を与えて下さった。御子の霊というのは、すなわち聖霊、神の霊、力です。その御子の霊に支配されているところ、そこが神の国です。だから、神の国のことをイエス様はお語りになって、彼らと食事をしている時に言われたのが、4 節、5 節の言葉です。「**エルサレムから離れないで**」と。エルサレムは彼らにとっては、まことになじみのない、りっぱな大都会であり、ファッショナブルであったと思います。時代の先端を行くような町です。しかし、彼ら自身はガリラヤの田舎の出身ですから、どうも居心地が悪い。ましてや、イエス様がいらっしゃるからついてきただけで、自分たちが好んでエルサレムに来たのではない。だから、イエス様がいらっしゃらなくなったら、当然、俺たちはふるさとに帰るべきものと思っていたことでしょう。しかし、イエス様はそこで「エルサレムから離れないで」、殊にエルサレムは、確かに多くの人の先端を行く大都会であったでしょうが、それと同時にそこには神殿があったのです。言うならば、神の臨在を証しする、いわゆる幕屋、かつてイスラエルの民が荒野の旅をしていた時に、その民と共にあった神の霊。それがエル

サレムにあることをイエス様は語っておられるのです。だから、ここから離れないでというのは、エルサレムという土地から、その町からという意味でなくて、エルサレムという言葉によって象徴される神の臨在、神共にいます所から離れないで、という意味です。そして5節に「**ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう**」と。ここでイエス様は聖霊のバプテスマということを語っています。バプテスマというのは、私たちがいっさいの罪ととがに死んで、キリストの十字架の死に合わされることを証しするわざです。古いものをすべて水に葬って、水から上がった時、イエス様が経験されたように、天が開けて、聖霊が鳩のように下った。これは神の子であると証しして下さった。それと同じ、御霊を私たちのうちに与えて下さる。これが神様の約束されたことです。だから、この御霊に満たされること、これが私たちの力です。なぜなら、その先を読んでみますと、8節に「**ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう**」と。ここに「**あなたがたは力を受けて**」と言われています。この力とはどこにあるのか。神様にあるのです。その力こそがまことの力です。

先程お話ししたように、肉にある力、サタンの支配のもとにある力は、私たちを神様から遠ざけ、神なき世界へと私たちを押し入れてしまう。そして、自我性、自我中心のわがままな思いだけを遂げようとする力となっていきます。これはサタンの力、人の力と、神様の力との大きな違いです。だから、イエスを神の子と告白する霊、これは神の霊である。それは力でもあるのです。8節に「**聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて**」、言い換えると、聖霊イコール力です。神様の力とは、御霊が私たちの内に宿る時の力です。御霊が私たちの内に溢れてくる。満ちてくる。御霊は空気のようなものです。私たちはそれを掴むことができません。見ることもできません。しかし、吸い込めば、私たちの身体の中に入っていきます。そして、私たちの血液をきれいにし、新鮮な血液は体中の組織を活性化し、元気を与えます。でも、その空気自体は見ることはできません。触ることもできません。ただ、それに信頼して、思いをそこに向けていく。今、ここに主の霊が働いて下さる。私の内に宿って、神様の力が注がれているのだと信じる以外ない。信じて、そのように主に従うことを努めていく。そのためには、しっかりと主の霊に、御霊に満たされていく。これが何よりも大切です。それが力だからです。そうする時、ここに言われていますように、わたしの証人になる。言い換えると、神様のみこころに従うことができる。それを証ししていく。今、私が元気なのは神様のみわざです。私がこうなったのは、神様がこうして恵もうとして下さったから。神様のわざですと、私たちが一つ一つしっかりと神様を認めていくことができるのは、御霊が働く時です。ところが、神様を押しのけて、自

分が、私がと思い始めた時、御霊は私たちから離れていきます。私たちの心に思う思いの中心にイエス様がおられるのですと言える時、私たちの心に霊の力が満ちていきます。ところが、神様を忘れて、人を恐れたり、人の言葉に従ったり、自分の感情や思い、情動、情欲に支配されて、神様を忘れると、御霊は私たちからスーッと引いていかれます。実に、微妙です。御霊は私たちを無理強いして、無理やりに事をなさらない。だから、私たちは気がつかないうちに御霊を離れていきやすいのです。聖霊の働きから離れていく。どうぞ、心して、常に今、私に神の御霊が注がれて生かされているのですと自覚していきたい。信じていく者となりたい。

初めに戻ります。「イザヤ書」40 章 31 節、「**しかし主を待ち望む者は新たなる力を得**」。主を待ち望む。神様の霊に満たされることを求めていくことです。それはどうやったらできるのか。私たちが静まって、心静めて、思いを静めて、神様の方に心を向けなければならない。というのは、私たちの心にはいろいろな事が詰まっているでしょう。あの事を心配し、この事を誇りとし、この事を願い、思い煩い等々、そういうものを一旦横に置いて、神様の力を求める。そうしないと、神様の力が私たちの内に宿る場所がない。まるでイエス様がお生れになったあのクリスマスの時、彼らを入れる余地がない。御霊が私たちの内に宿るべき場所を用意すること、これが主を待ち望むことです。だから、どんなに忙しくても、世の営みから離れて、霊の力を与えて下さいと、御前に静まること。これが大切です。そうして、私たちの内に力が注がれる時、「さあ、行こう」と力が溢れる。あのイエス様がゲツセマネでお祈りになった時、その力を求めたのです。自分の思いではなくと、自らの思いとの戦いをあのゲツセマネの園で繰り広げて下さったのです。それは私たちがそういう中を通るよと、イエス様ご自身が実体験をして見せて下さった。だから、私たちが肉の働きに支配されることも、イエス様はご存知です。イエス様も願う事ならば、この杯をわたしから取り去って下さいと願いますが、しかし、わたしの思いではなく、あなたのみこころをなさってくださいと三度も祈った。その戦いを通して、イエス様は神様の力に満たされてくるのです。まるで海が気づかないうちに満潮になっていくように、祈っているうちに、だんだんと力がわいてきます。そうした時、ついにイエス様は「さあ、行こう。立て。その時が近づいた」と力強く立ち上がる。その時をきっかけに、後を振り返らない。まさに、十字架に向かってまっしぐらに進んで行きます。自分の命が絶たれようとしている所へ出て行く力はどこから来るのでしょう。イエス様だけに与えられているのではありません。私たちにもその力を神様は与えようと。だからこそ、ひとり子をこの世に遣わして下さった。31 節に、「**しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない**」。御霊の力に満たされて、御霊に押し出される。

それはまるでわしのように翼をはってのぼる。わしという大きな鳥は、決して羽をばたつかせてはいません。彼らは大気の流れにのって、上昇したり、下降したり、変幻自在に動くのです。それは自分の力ではありません。だから、何千キロというどんなに長くても、飛ぶことができるのです。渡り鳥もすごいです。二千キロとか三千キロという所を行ったり来たりする。神様の霊の力に持ち運ばれていく。その時、私たちは疲れることなく、弱ることがない。こんなすばらしい力を私たちに与えようと願っておられるのです。抽選で与えるというのではない。誰でも、求める者に与えるとおっしゃっておられる。だから、「**主を待ち望む者は新たなる力を得**」、常に主を待ち望んで、へりくだって、主の力を求める。

「士師記」に、大力サムソンの記事があります。サムソンは神様に選ばれ、ナジル人として、神様に仕える使命を与えられる。その当時、イスラエルの民は、ペリシテ人にさんざんと苦しめられていた。彼は自分の力をもって、ペリシテ人を次々となぎ倒して、やっつける。相手はたった一人のサムソンにてこずって、何にもできない。とうとうデリラという女性を使って、色仕掛けで彼を誘惑する。そして、力の秘密を問うのです。そうすると、自分は神にささげられたもの。だから、髪の毛にはさみを入れたことがない。髪を伸ばしている。その秘密を知ったペリシテ人は、早速彼が寝ている時に、はさみで切ってしまいます。それはあくまでも一つのしるしであって、髪の毛に力があるかないかということではない。そういう風に決めなさった神様の言葉を守るかどうかということです。彼が自分の力の秘密を漏らしてしまった。それは神様を押しのけて、自分の判断と力でやってしまったことでした。いわゆる肉の力がそこに働いている。その時、行き詰る。彼ははっと気が付いて、「ペリシテ人が攻めてきた。よし、戦うぞ」と出て行ったら、何の力もない。私たちも肉の力が私たちを激しく襲ってくる時、自分の肉の力で治めようとしても、それはできないのです。負けます。感情のほうが強いです。情欲の方が強いです。それを打ち負かしていく力は御霊によるしかない。サムソンは力を失った。とうとう捕らえられ、目をえぐられ、ガザに引かれていって、奴隷として大きな石臼をゴロゴロ引く仕事に、奴隷の仕事をさせられるのです。でも、その間、彼は悔改めます。そして神様の前に申し訳ない。もう一度、自分にその力を与えて下さい。神様は彼の悔改めに応えて、力を満たして下さった。そのしるしとして、髪の毛が伸びてきて、と記されています。髪がずっと長くなると、それに応じて、神様は彼に力を与える。やがて、ダゴンの神の祭の日に、彼は見せ物として、皆の笑い草となるために引き出されていきます。大きなダゴンの宮の中に連れて行かれた時、彼はこの宮の中心の柱にわたしを縛ってほしいと願う。それで彼はそこに縛りつけられて、多くの人がそこに集まっていた。ペリシテ人が彼をなぶりものにするのです。しかし、その時、彼は、「神様、あなたの力を現して下さい」と祈って、力を

こめて、柱を引っ張った。その時、一気に大きな建物はつぶれていく。集まった人たちはそこで死んでしまいます。その記事に、彼が生きていて殺したペリシテ人の民よりも、このことで死んだ人の方がはるかに多かったと記されています。神様が働かれた時、その力を発揮します。

私たち自分が弱いと思った時、もう一度、神様の力に満たされなければと思う時、へりくだって主の許に立ち返って行こうではありませんか。31 節「**しかし主を待ち望む者は新たなる力**」。新しい力に満たされるのです。この年もいろいろな事に遭うと思います。しかし、そのたびに神様の力を受けて、わしのように、大胆につばさをはって、御霊の導かれる所で、与えて下さる力をしっかりと受け止めていきたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。